

特集 アジアの 百姓は 怒っている

貿易と投資の自由化、いわゆるグローバリゼーションはろくなものを生み出さない。とくに百姓にとっては。農産物価格は下がり、外国から入ってきた企業によって土地から追い出され、先進国の企業が出す排気ガスで進む地球温暖化によって起こる異常気象で家も畑も押し流され……。今、日本を含むアジアの小さい農民、百姓の上にふりかかっていることのほんの一端だ。アジアの百姓は怒っている——。(編集部)

各国のTPP参加の動き
そもそもTPPとは、シンガポール、ニュージーランド、チリ、

ブルネイの4カ国が集まって2006年に発行した地域的な自由貿易協定(FTA)である。徹底した自由化路線を取り、モノの貿易には例外を認めず全品目の関税が撤廃され、他にも公共サービス、政府調達、知的所有権、人の移動なども含む包括的協定である。公共サービスには、医療や教育、福祉、上下水道など、これまで行政が担ってきた分野にも規制緩和・外貨導入・民営化が導入されることになる。2009年のAPCE(アジア太平洋経済協力会議)で米国が突然参

2010年12月17日。東京都茗荷谷に、農民を中心にジャーナリストや市民団体などを含めて日本全国から約40人が集まった。去る10月1日、菅首相の所信表明演説で前触れもなく取り上げられたTPP(環太平洋経済連携協定)に参加し

た、日本の農業は壊滅的になる、何とか反対の声を上げていこうというのが寄り合いの趣旨であった。**日本の米生産の状況**
まずは、寄り合いを呼びかけたひとりである山形県長井市の菅野

芳秀さんが口火を切った。「そもそも米価が下がりが続いている、農業が立ち行かない。借金しながら米を作っている。田んぼを放棄する人も増えている。農民はもう生きていけないところまで来てしまった。しかし、農業は農民のものではなくて、人びとの食べるものをつくるということ。食と命がかかわる問題だ。」



日本の中山間地の風景。

日本から百姓が消えていく ——農民寄り合いのレポートから

吉澤真満子 / よしざわまみこ
APLA事務局長

地に足つけて、生きること

向井真珠 / むかいまみ
特定非営利活動法人ピースウィンズ・ジャパン尾道事務所スタッフ



「自分で食べるし、うちは自分でつくりたか」そうつぶやきながら、冬の陽だまりの中で大豆の殻むきをするおばあちゃんの姿を、ひどくうらやましい気持ちで見つめていたのを覚えている。あれはたしか4年前、九州のどこかの村だった。マチ育ちだった私にとって、日本各地の農村集落を自分の足でまわりながら農家を訪ね歩く仕事は、毎日が新鮮だった。しかし、日々の食事が上げ膳据え膳の旅館暮らしがだんだん苦痛になっていった。

その後、東京本社編集部へ異動してからはもっとひどいことになった。仕事の拘束時間が長すぎて、食事をとる余裕がなくなった。寝るのが遅いから起きるのも遅くなり、朝もきちんと食べられずに満員電車で身をゆだね、会社に着いたらひたすらパソコンの前。昼食だけはなんとか抜けて食べてはいたが、夜は23時過ぎまで何も食べずにパソコンに向かい続け、へロへロ状態で終電に乗り、家へたどり着くという体たらく。しまいにはもぬけの殻のようになり、鬱になってしまった。期限のない休みをもらい外に出られるようになったある日、木の根元に寝転がって新緑の葉が覆う青空を見上げ、ようやく「生きていく」感覚が甦ってきた。しばらくすると瀬戸内海の尾道で働く話がふつてきて、自然な流れのままにこの地にやってきた。

今、穏やかな青い海が見え、山のさまざまな緑に包まれる我が家の縁側で、カラカラに乾いた小豆の莢をむいている。お腹では春に生まれ来る我が子がポコポコと動いている。平和ボケしてしまいそうなくらい幸せだ。「途上国」の現場で「活動」していくことを志向していた自分は今、ようやく自分の生きるべき足場を見つけた気がする。それは、ヴァナキュラー(Vanaculer) 地域に根差した暮らし。これまで出会ったアジアの人たちに感じていたたくましさ、それは日本各地の農村で出会ったものと同じだった。地に足つけて生きることに、それがこれからの私のテーマである。■

CONTENTS ■ HALINA 11 2011.02.01

- 02 Relay Essay ポコポコ⑪ 地に足つけて、生きること◎向井真珠
- 03 **【特集】アジアの百姓は怒っている**
日本から百姓が消えていく——農民寄り合いのレポートから◎吉澤真満子
ゴムに追われ、土地から引きはがされる小さな民◎大野和興
自然災害の復興支援活動から見えるパキスタン農民の暮らし◎西村光夫
北部ルソンの小規模農民の窮状◎グレッグ・ラシガン
- 08 **【Topics】**
山村ツーリズムから定住促進へ——中国山地で地域自立を考える◎相川陽一
- 10 **【Column】**
しらかべ便り◎ 冬の蝶◎芳賀則政
むらさきを歩く◎ 奥秩父中津川集落に伝わる中津川いも◎大野和興
まだまだ韓流◎ 韓仏共同制作映画『冬の小鳥』◎鳥羽みさを
Have you ever seen the Cinema?◎ 『モハメド・アリかけがえのない日々』◎重政栄一郎
- 12 撮っておきアジア⑪ 韓国 江原道、全羅南道◎朴鏡珍
- 13 APLA生活⑪ エコシュリンプ エコシュリンプの生産現場を訪れて◎大橋由美子
- 14 **【Voice from APLA partners】**
【ネグロスより】カネシゲファーム・ルーラルキャンパス(KF-RC)2011年の抱負を語る
- 15 事務局便り

表紙のことば

タイ北部の山岳地帯には約9つの少数民族が暮らしている。この刺繍はその中のモン族の民族衣装につけられる模様であったが、最近ではバッグやポーチ、アクセサリーなどに転用して、フェアトレード商品として販売されている。モン族の女性たちが一針ずつ丁寧に縫ってくれた模様からは、彼女たちの文化の豊かさがにじみでている。

ラオスに暮らすモン族の民話『かたつむりとさる』の絵本を娘に読み聞かせていたとき「あ、これタイで買ったママのポーチと同じ!」と指をさしたのが、この模様。民族の模様は、国境を越えても、言葉がわからない子どもでも、相手と同じ民族かどうかわかるための「マーク」なんだ、と改めて実感した瞬間だった。(堀芳枝)

国道に沿ってゴムの大プランテーション。



きるのは一握りの人たちだろう。その前に日本の農業はもたない」と寄り合い参加者の農民たちは口をそろえる。

TPP参加の議論をめぐり、農業保護のために国益が犠牲にされてもいいのかという意見もある。前原外相の「(GDP)1・5%を守るために、98・5%を犠牲にしてもいいのか」という発言もあったが(この数字の取り上げ方の問題性は別にしても)、果たしてTPPに参加することで残りの98・5%の人が幸せになれるのか……と言う議論も寄り合いではなされた。逆に輸出産業の利益のために失うものも出てくる。これまで金融、医療、労働者の移動も含むサービス分野は開放困難な分野とされてきたが、それが開放されれば、雇用や生活全般にも影響が出てくる。低価格での海外の労働者との競争も生まれてくるのではないかと懸念される。

この状況が現実となると、ますます格差は広がり、人びとの日々の生活の犠牲のうえに国益があるということになるが、何のための国益なのか、生き残りなのか……と言う疑問が浮かんでくる。成長の神話に取り付かれていた昨今の風

潮の中、人びとの生活と引き換えに優先されるものとは何なのか……。

今回の寄り合いでは、まずは6月までの間にTPP参加を反対することが確認されたが、ただ反対するということだけではなく、これからの農業を、日本社会をどうしたいのか、という本質が問われていることを改めて参加者で確認

した。この問題は農業従事者だけの問題ではなく、すべての人に関係してくる問題として、今まさに私たち一人ひとりに突きつけられていることを認識しなくてはならない。■

■この農民寄り合いを受けて、2月26日(土)には東京でシンポジウムが行われます。詳しくは「当たり前に生きたいマチでもムラでも」
(http://geocities.jp/yaoyahyakusho/nuramachi/home.html)
■TPPに関しては、APLレポートNo.4「自由貿易と農業」もご覧ください。



ゴムの樹液を採取。

見える。

ゴムに追われる農民

メコンを下る旅は、ゴムを追いかける旅でもあった。2008年、中国・雲南省でタイ少数民族の村を訪ねた。野菜、米、トウモロコシが手入れの行き届いた田畑に植えられ、規模は小さいが農業と農外の収入で安定した暮らしを営んでいる村であった。その村で数年前からゴムの木栽培ブームが始まり、周辺の傾斜地ばかりでなく田

んぼや畑をつぶしてゴムの苗木を植える農家が増えてきた。話を聞くと、樹液がとれる7年生以上の木を所有している人は、儲かって儲かって笑いが止まらないのだという。

新興経済大国中国とインドで始まった自動車ブームが、雲南の山間部の少数民族の小さな農業をゆさぶっているのだ。

そのゴムブームに東北タイ、ラオス、そして今回のカンボジアでも遭遇した。東北タイでは政府が奨励してゴムの木とキャッサバが、やはり田んぼや畑を転換する形で大きく広がっている。キャッサバは従来のタピオカ澱粉用ではなくバイオエタノール原料という新しい用途向けで、エタノール製造工場がいくつも稼働し始めている。

ラオスでは北部を中心に、従来焼き畑で米を作っていた土地にゴムが植えられている。中国から買い付け業者がやってきて生産を奨励、できたゴムを中国に運ぶ。ラオス

政府と契約して50年間の契約で土地を確保し、ゴム園を始めた中国企業もある。ゴムを中国に売り、米を中国から買う農民も出始めているということだった。

土地を囲い込まれて

陸路をラオスからカンボジアに入ると、ここでは中国、ベトナムからの資本進出で設立された企業によるゴム、砂糖キビなどの大農園が動き出していた。入国管理事務所が置かれたドンクラウの町から国道7号線を南下する。しばらく進むとゴムの幼木が植えられた農園が続く。このあたりでは中国やベトナム系の企業がゴムの木や砂糖キビ、バイオエタノール用のキャッサバ、家具などに用いるチークの木などの農園を展開している。ベトナム系の企業のひとつは政府と99年という超長期の土地賃貸借契約を結び、ゴム園を運営している。

道路沿いにチークの樹園地が見えたので車を乗り入れ、管理人に中を見せてほしいと頼んでみたが、部外者は一切お断りしているということだった。ジージーワールド社という。農園の面積は5800

ha、うち800haに元からこの土地を耕している農民が今も住んでいると話してくれた。

カンボジアの多くの土地がそうであるように、このあたりも元は森林で、名目は国有地であった。政府高官や高級軍人、彼らとつながりを持つ金持ちや企業が木を伐採して売り払った。その後、企業に払い下げられたり、土地なし農民が入って開墾、耕作地にした。外国企業には超長期の契約で貸し付けられた。近年、荒れ地を開墾して小さな土地を耕作をはじめた農民が、企業に土地を囲い込まれ、取り上げられるという事態が続出している。そういった耕作農民はわずかな補償金をもらえれば

まちな人たちも生きていけない

では、日本がTPPに参加した場合にはどうなるのか。農林水産省による国境措置撤廃がもたらす農産物への影響の試算では、米の生産量減少率は90%で、小麦は99%、牛乳乳製品は56%、食料自給率は40%から14%まで減るとされている(カロリーベース)。

TPPに参加しなければ、世界に乗り遅れるといった論調を打ち出すマスコミは、農業における国の補助を規模拡大や意欲ある農家を伸ばす方向に使い、新興国への農産物輸出による市場開拓も期待できるとするが、「それで成功で

きるのには一握りの人たちだろう。その前に日本の農業はもたない」と寄り合い参加者の農民たちは口をそろえる。

TPP参加の議論をめぐり、農業保護のために国益が犠牲にされてもいいのかという意見もある。前原外相の「(GDP)1・5%を守るために、98・5%を犠牲にしてもいいのか」という発言もあったが(この数字の取り上げ方の問題性は別にしても)、果たしてTPPに参加することで残りの98・5%の人が幸せになれるのか……と言う議論も寄り合いではなされた。逆に輸出産業の利益のために失うものも出てくる。これまで金融、医療、労働者の移動も含むサービス分野は開放困難な分野とされてきたが、それが開放されれば、雇用や生活全般にも影響が出てくる。低価格での海外の労働者との競争も生まれてくるのではないかと懸念される。

この状況が現実となると、ますます格差は広がり、人びとの日々の生活の犠牲のうえに国益があるということになるが、何のための国益なのか、生き残りなのか……と言う疑問が浮かんでくる。成長の神話に取り付かれていた昨今の風

東南アジア最大の大河メコンを下りながら、流域の村々を訪ねる旅を始めて3年になる。一昨年は中国・雲南省からタイへ入り、昨年はラオス北部の山間地帯から南部の都市パクセイまで歩いた。そして2010年は、ラオス南部からカンボジアに入り、トンレサップ湖に向かった。中国、ラオス、タイ、カンボジア、ベトナムを流

れるメコン流域で、川の恵みを受けて暮らす人びとは5000万人といわれる。その多くは農漁民だ。アジアの村を歩く20年の旅の集大成のつもりで始めたこのメコン下りで見えたものは、農をなりわいとして暮らす農民という社会階層が丸ごと消えていく、そんな光景だった。そして、それは日本の農業と農村の現実とぴったりに重なって

ゴムに追われ、土地から引きはがされる小さな民

大野和興／おのおのかずおき
農業ジャーナリスト

山村地域(中山間地域)は日本列島の約7割を占め、総人口の13・7%にあたる人びとが暮らしている。山村では近代以前から、山に関わる様々な生業(たたら製鉄、薪炭製造、木材伐出など)と稲作を組み合わせた多職的な兼業世界が形成されてきた。しかし高度成長期を境に深刻な人口減少と高齢化に直面し、集落や地域社会の存続が危ぶまれるところも多い。

人口構成から見れば、今はわずかな比率かもしれないが、山あいに暮らす人びとが長年かけて守ってきた森や水田は、治山・治水や食料生産の面で都市に暮らす人びとの生存基盤を支えている。山村には、都市だけでなく平野部の農村でも失われてしまった自給的な暮らしが息づいており(例えばマキ風呂、炭こたつ、山草の肥料活用など)、環境共生型の暮らしを模索するうえで先行モデルとなる可能性も有している。こうしたら／いかにして、山村地域のもつ、経

済的価値だけに還元できない社会的な有用性や公共性を都市に暮らす人びとと共有していけるのか。筆者は2009年から2011年にかけて西中国山地に位置する島根県浜田市弥栄町(旧那賀郡弥栄村)に暮らし、都市から山村への移住に関するフィールドワークと住民・自治体がすすめる地域おこしの支援に携わりながら、この問いへの答えを模索してきた。

まずは、まちとむらに暮らす人びとが山村生活のリアリティを共有しながら議論する場が必要だろう。共に歩き、共に食べ、身体を動かしながら山村の

魅力や可能性と課題について議論したい。そんな動機で特定非営利活動法人APLAが企画・実施したスタディツアー『島根県弥栄町を訪ねる旅——山村自給の世界から交易を考える』の現地コーディネートを担当した。

語ることで人も地域も元気になる

弥栄は2つの「顔」をもつ。ひとつは高度成長期に全国一の人口減少率を記録した過疎地として、もうひとつは「イターン」という言葉すらなかった1970年代の初頭から都市の若者を受け入れてきた山村移住の先進地としてである。スタディツアーでは、弥栄に生まれ育ったベテラン林家と都市生まれのイターン農家が案内役を務めた。8名の参加者は、イターン農家が編み出した水田に海水を投入する稲作技術に感嘆し、ベテラン林家の案内でクマよけの鈴をつけて初秋のブナ原生林を歩き、中国山地の奥部から山並みの向こうに日本海を眺め、高度成長以前の日常生活を支えた巨大な炭窯に驚き、若手農家と共に石窯で焼いた山と海の幸を楽しみながら、山村の魅力と課題を深夜まで語りあった。

山村に人びとを呼び戻すために最も必要なことは、迎える側の主体形成である。「誇りをもって地元を語る人」

は地域に活力を生む。遠方から訪ねてきた人に「こんなところまでわざわざ……」ではなく、「ここはええところよ」、「また来ちゃんさい」、「なんならずっと住みなさいや」と語る人を増やすことだ。人は人の魅力で移り住む。その意味で、山村ツーリズムは定住促進とつながっている。弥栄では、地域づくりを役場や外部の専門家まかせにせず、「自分たちがやらなきゃいけないんだ」と考え行動する住民も現れ始めた。

地域自立は「人づくり」から

従来の農山村への支援は、モノやカネの支援が先に立ち、補助金漬けになった地域で住民の自発性が減退した。補助金を「援助」と言い換えてみれば、開発援助への依存が問題視されてきた海外諸地域と補助金漬けになってきた日本の農山村はそう遠く離れてはいない。近年、国際協力NGOが国内の農山村問題に取り組みはじめている。今回のスタディツアーを機に、住民自身による地域社会の変革を支援する手法(エンパワメント)について、経験豊富なNGOと日本の農山村で地域振興に携わってきた官民諸主体が出会う場を作りたいと考えるようになった。■

至るところに農業を宣伝する看板が。



多種目少量栽培に立ち返った仲間の畑。



物を農業や化学肥料に頼らない伝統的な農法で生産し、人間と自然の共生状態を保っていた。しかしながら、1990年代初頭に野菜の商業的大量生産の形が地域に流入し、経済活動は自給自足的なものから現金収入を中心としたものに徐々に変化し、それは人びとの生活様式の変化にもつながっていた。

置き換えられた文化的価値

今日では、カヤパの農民は、現金と引き換えに、自分たちの地域のためでなく増え続ける低地の都市人口を養うための野菜を生産することにシフトしてしまった。その結果として、多くの農民が自分

の農地に対するコントロール、そして作物を育てるにあたっての優先順位を自分たちで決める力を失ってきている。さらに、カヤパの住環境はどんどん悪化し、互助を尊んできた文化的価値が、個人主義と消費主義に置き換えられつつある。

なぜそうしたことがおこっているのか？ 種子会社や大規模農産物バイヤーがさかんに宣伝している「生産量増が収入増に、収入増がよりよい生活に」というキャッチコピーが、農民にとっての大きな「希望」になっているのだ。それにより、サツマイモの畝の間に何種類もの自家消費用野菜を植えるという従来の形は、キャベツや

ブロッコリー、人参などの換金作物の単一栽培にとってかわられてしまった。こうした栽培作物の変化は、水の利用方法にも変化をもたらした。伝統的に栽培されてきた棚田米のための灌漑に代わり、換金作物に必要な水が何よりも優先されるようになったのだ。換金作物の収穫が予測量に到達しないということは、「バイヤーからの借金返済ができない」破産を意味するからだ。地域の食料安全保障は大幅に弱まり、自然環境も常におびやかされている状態である。

カヤパの窮状と希望

カヤパの農民を窮状に追い込んでいる要因は何だろうか？ ①他国から輸入される補助金付けの安い農産物との競争に勝つことができない、②政府は、本当に補助を必要としている小農民ではなく、利害関係のあるところへ補助金を拠出し続けている、③悪徳中間業者(バイヤー)による価格操作、といったこ

とがあげられる。確かに換金作物の大規模栽培によって成功した農民がいけないわけではない。その収益で、テレビや中古車を手に入れたり、消費文明がもたらす様々な商品を購入することができる。しかし、彼らの生活の質がよくなったかどうかには疑問が残る。残念なことは、カヤパの農民のほとんどが、野菜の単一栽培から高収入を得るといふ夢を追い続け、その結果、バイヤーや農薬・肥料会社のみならず、自分たち自身も困窮していることだ。

それでもなお、カヤパの状況は絶望的であるとは考えていない。最近になって、様々なイニシアティブが住民から生まれ、地域の暮らしを取り戻そうという取り組みが随所で始められているからだ。真の農民としての尊厳や地域の文化的価値を取り戻すため、「No Farmer, No Food(農民なくして食料なし)」というモットーをかかげ、強い決心のもとに動き出した仲間。その道のりはまだまだ長い、確かな一歩を刻んでいる。(抄訳：野川未央)

〔注〕フィリピン首都マニラで流通している野菜の7〜8割が北部ルソンから運ばれているといわれるほどの野菜の産地である。

このコーナーは「KAJA」のメンバーの方たちに交代で書いていただいています。

03

まだまだ 韓流

05

鳥羽みさを / とば・みさを

KAJA (Korea And Japan Alternative learning group) 会員



『冬の鳥』(全国順次公開中)
(C)2009 Copyright DCG Plus & NOW Films, GLORIA Films.
All Rights Reserved.

秋、日本で公開された。『冬の鳥』の脚本を執筆した。長年、自分の心にわた

韓仏共同制作映画『冬の鳥』

1975年、9歳のジニが父との楽しい旅行と信じてやって来たのはソウル近郊の児童養護施設であつた。父親と一緒に門をくぐったもの

かまりとして残る自分の過去を「映画」という媒体を通して問い直す営みが作品となった。

シナリオを読んで制作を買って出たのは、『ペーパーミントキャンデー』等、独自の視点で映画を撮り続けるイ・チャンドン監督。ジニの父親役にソル・ギョング、医師役にムン・ソングン等が脇を固めた。

韓国の海外養子は、1950年の朝鮮戦争で米軍兵士と韓国女性との間に生まれた戦争孤児を米国のキリスト教団体が海外で引き取ったことに始まり、1953年の休戦後も貧困児童を対象に続けられ、20万人に近い数の子どもたちが海外に引き取られたという。

海外養子をテーマとしたドラマには、『こめん、愛してる』『ホテルア』等があり、映画にも、『マイフアザー』等があるが、本作品の特徴は、海外に渡った本人が、養子に出された経緯を、そのときの自己の思いと共に映像化し、監督の分身であるジニが歌うように、父への変わらぬ思いを確認した点にある。

ドレステザインを学び、映画の衣装担当の経験もある監督の作品だけあって、子どもたちの服装には、夢と遊びがあり、暗いテーマの背景で温かな光を放っている。

01

しらたか 更り

05

芳賀則政 / はが・のりまさ

句会「海界」主宰者



ぶなの木 (蔵王にて)

しらたかノラの会の商品が買えます。お問合せ先02388855675(めぐり屋内)

冬の蝶

山頂駅でゴンドラをおりると、真っ青な空と真っ白な樺林がとびこんできた。昼はあの沼のそばにしよう。ザックを背に、落葉でうずまいたぶな道を歩く。今年は、夏の猛暑が秋にまで入りこんで暖かく、なかなか紅葉してくれない。深い錆色のままの落葉。存在感のない秋だった。山頂であるこのあたりはどうだったの

と、蝶がいつびきやってきた。咲いている花もみられないこんな時期に私のまわりを飛びまわり、地面の草むらに羽根をびったりとくっつけてうごかない。何という名の蝶だろう。しばらく私の眼をたのしませ、急上昇してぶなの梢に消えていった。蝶の飛びかたをみていると、じつに鋭角にとんでいく。そして速い。もう冬の蝶だというに、荒々しい折れ線グラフのように。歳時記で蝶は春の季語であるが、季が移ればそれぞれの季をつけてよばれる。今日の蝶は、赤蜻蛉という種類ではないかと思つた。

羽根はオレンジ色に黒が点々とはいつている。成虫で越冬し、あたたかい日に飛んででてくることがあるという。ゆるゆるとはかなげに飛ぶというのが冬の蝶の本意であるが、今日のこの蝶の元気にびっくりする。蝶の語源には、魂、呼吸、揺らぐという世界共通の意味があり、日本でも魂の化身といわれている。沼と空とぶなの樹々の織りなす空間をみつめながら、ごっこつしたぶなの一本を私の木ときめ、おつきあいをしてみることにした。

ひるがえりふりかえりして冬の蝶

04

Have you ever seen the Cinema? あの映画を見たかい?

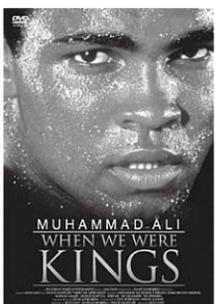
05

『モハメド・アリ かけがえない日々』(1996年、米国)

【監督】レオン・ギャスト 【出演】モハメド・アリ、ジョージ・フォアマン

重政栄一郎 / しげまさ・えいいちろう

エディトリアル・デザイナー



『モハメド・アリ かけがえない日々』

全世界10億人もの注目を集める中、1974年10月30日にサイール(現コンゴ民主共和国)、キンシャサで行われたボクシング世界ヘビー級タイトルマッチ、世に言う「キンシャサの奇跡」を追ったドキュメンタリー映画「対戦はジョージ・フォアマンとモハメド・アリ。フォアマンは40連勝中、無敵の若きチャンピオン。一方のアリはベトナム戦争への徴兵拒否によりベルトを剥奪され、3年半ものブランクを経ての復帰戦。もはや過去のチャンピオン。誰もがフォアマンの勝利を疑わない中、アリだけが自らの勝利を豪語し、吠えまくる。意味不明の邦題が付されているが、原題は『WHEN WE WERE KINGS』。これこそがこの映画にふさわしい。

「KING」とは誰か? 主役のアリはもちろんKINGに間違いないが、主語はWE、KINGはKINGSと複数形だ。試合を前にアリは吠える。「アメリカはクソ喰らえだ。アフリカは黒人の故郷だ。アフリカの兄弟たちの前で試合をする」。対戦する二人。彼らの取り巻き。プロモーターのドン・キング。1000万ドルのファイトマネーを出した恐怖の独裁者。モブツ大統領。同時開催された音楽祭のジェームス・ブラウンをはじめとする出演者。熱狂するサイールの観衆。ここにいるのはすべて黒人だ。「KINGS」とは胡散臭い怪しい人物も含め、この企てに関係する黒人たちが全員のことだ。そしてそのメッセージは世界中の虐げられたすべての黒人に向かう。アリは言う。「黒人が望むのは社会的な自律だ」「白人に依存しない黒人社会を作りたい」。民衆のアリに対する熱狂は圧倒的だ。その模様は神格化とさえ言える。スパイク・リーが証言するようにアリは「本当の英雄」なのだ。英雄とは人びとを魅了し、人びとの憧憬を一身で受け止め、人びとの期待を更なる力に変え、戦い続ける者である。その存在は希望であり、やがて伝説へと昇華する。民衆はアリの一言一句、一挙手一投足を注視し続ける。

映画の最後にアリが即興で作った世界一短いとされる詩が紹介される。Me, we. そう、アリの口から発せられる「俺」は、すなわち「俺達」なのだ。

02

むらを歩く

11

大野和興 / おおの・かずおき

農業ジャーナリスト、本誌編集長



伝統食「いもぐし」をつくる。

奥秩父中津川集落に伝わる中津川いも

中津川いもという地種のジャガイモがある。秩父市大滝地区中津川(旧大滝村)で古くから作られているジャガイモだ。小粒で楕円形、薄赤い皮が特徴。大滝いもともいわれる。中津川は標高800メートル、群馬県境に接する山の集落だ。平場はまったたくなく、このあたりで「ななめ畑」といわれる急傾斜の畑で細々と作られ、守られてきた。やせ地で育ち、寒さに強いことから、貴重な食料として、奥秩父と山で連なる群馬の山間地でつくられてきた。

なぜこの地で作られるようになったのかには、諸説がある。日露戦争でロシアにいった農民兵士がふんどしに隠して持ち帰ったという説、同じく日本に兵隊がペルーから持ってきたという説、などなど。ペルー説

は、日本の兵隊が南米まで行ったという話は聞かないから、兵士ではなく開拓にいった日本人が持ち帰ったということなら理解できる。なにしろ中津川いもはアンデスの原産に近いという感じがするからだ。暇ができたら、中津川いものルーツを追う旅に出てみたいものだと思つている。このいもの伝統的な食べ方に「いもぐし」がある。ふかしたいもを竹串に刺して、いろりのまわりに刺し、たれをつけながらあぶる。たれは各家庭でそれぞれ独特の持ち味があり、みそが主で、その中にゴマ、エゴマ、サンショウの実、クルミなどを入れて練る。コメがとれない奥秩父や峠を越えた上州奥田野の村々では貴重な食べものだった。この「いもぐし」いまでは伝統食として観光客に喜ばれている。

今、山間地の畑はイノシシやシカ、サルなど獣の被害に悩まされ、生産が減っている。だが、平場に持つてきて植えても中津川いもの持ち味は失われ、条件がよいから大ぶり・大味のいもになってしまう。高齢化や開発で山を離れた村人は、必ず種いもを抱えて山を下りたが、「いも味の味がしない」と昔を懐かしがる。中津川いもはななめ畑のやせ地に限るのである。

今回のお題

エコシュリンプ エコシュリンプの生産現場を訪れて

レポーター
大橋由美子 / おおはし・ゆみこ
グリーンコープ共同体 組織委員会委員長



海 老、エビ、えび！ 私はエビが大好きで、「エコシュリンプ」のヘビーユーザーです。そんな私が参加したフィリピンとインドネシアを訪問するグリーンコープの「2010年度 from ネグロス組合員ツアー」では、インドネシア・東ジャワにあるシドアルジョの養殖池でのエビ取り体験が目玉のひとつになっていました。訪問者が

Tシャツ・短パンの軽装でドボンと池に入れる、そのことだけでも薬剤などで汚染されずに自然の摂理の中でエビが育っていることが実感できます。エビ獲りド素人には、広い池の中のびのび暮らしているエビを見つめるのがまず大変。胸まで水に浸かりながらの悪戦苦闘となりました。参加者は「獲ったとー！」と叫びながらの体験となりました。

収穫されたエビたちと生産者たち

収穫したエビは、その場で青い専用ボックスに氷漬けて密封され、オルター・トレード・インドネシア（ATINA）社の加工工場に運ばれていきます。ボックスごとに生産池の情報などがきちんと管理されているとのこと。また、ATINAスタッフが定期的にそれぞれの池を訪問して、生産者から困っていることを聞き取ったり、コミュニケーションを取っているとのこと。そこには、搾取る側とされる側という関係がなく、お互いに支えあっていることが感じられました。搬入とチェックは生産者ごとにきちんと行われるので、搬入終了は毎日夜11時頃とのことでした！

初めてのエビ皮剥き体験

洗浄、選別、加工、凍結、袋詰めなどを行っているATINA加工工場内は極めて衛生的で、中に入るのは、裸足で足を洗い、キャップ・マスクは当然、使い捨てゴム手袋の上からも消毒する徹底ぶりです。番号入りの従業員のユニフォームは、毎日石けんで洗ってアイロンがけがされています。また、凍結はここで1回のみなので、日本の私たちの食卓までエビ本来のおいしさがそのまま届きます。冷凍中の乾燥を防ぐため、氷の膜で包み込むグレージング工程もおもしろい秘密です。一通りの見学の後、私たちは、エビの殻剥きと背ワタ取りの加工体験をしました。従業員の皆さんの早業に驚き

つ、間に挟んでもらうってのマンツーマン指導開始。まあまあ上手レベルのメンバーもいたけれど、私は「日本では背ワタをとらないの？」と尋ねられる始末でした。ATINAの従業員の皆さん（多くは女性）との昼食時の交流時に、さっきはマスク姿だったけれど、殻剥きの先生もこの中に入ると気づきました。…。昼食時の皆さんはよく笑い、とってもフレンドリー。話をしてみると、毎日楽しく働いている、休日子どもと触れ合うのが楽しみ、など、母親としての顔も見えてよりいっそう親近感を覚えました。



皮剥き体験をするツアー参加者たち。



ATINAから送られた記念品と一緒に撮影。

Totteoki ASIA

撮影者○朴鏡珍 / パク・キョンジン
撮影場所○韓国 江原道、全羅南道



1	2
3	
4	

- 1 — プムル
プムルとは、韓国の伝統的な民衆音楽で、太鼓、踊り、歌で盛り上げます。プムルは農民文化である“ドゥレ（結い）”がルーツで、かつては農村の祭日に執り行われる儀式でした。ドゥレ生協の収穫祭でもプムルが行われ、収穫の喜びと感謝を表しました。
(江原道原州市、2009年10月10日)
- 2 — 畑でスマイル
韓国人びとの主食は米なので、米はとても重要な食物です。毎年秋が来ると農民たちは米を収穫し、一番喜ばしい季節の到来となります。しかし、気候変動に伴い、2010年は不作でした。来年は農民が笑顔を取り戻せるように願うばかりです。(江原道原州市、2007年9月5日)
- 3 — 魚の日干し
この伝統的な魚の日干しの方法をドック・ジャンといいます。木でできた棚に並んでいるのはタラです。通常漁師たちは秋にこの魚を獲り、冬に乾燥させます。強風、霜、雪にも負けず冬を過ごしたタラは、とても歯ごたえがあり、味も深まり、栄養素も高まります。昔の人びとはよく、人生をこのドック・ジャンになぞらえました。(江原道江陵市、2010年1月10日)
- 4 — 白菜畑の夫婦
白菜はキムチ作りに欠かせない野菜です。昔の人びとは、冬が来る前にキムチを仕込んで、野菜が穫れない冬の間のビタミン補給として食べていました。今日では、ハウス栽培の野菜を冬でも手に入れることができますが、キムチ作りの伝統はそのまま引き継がれています。(全羅南道海南郡、2009年11月26日)



このコーナーでは皆様の写真を募集しています。

募集内容○アジアを旅した写真5枚程度(日本も含まず) 詳しくはAPLA/あぶら事務局(TEL:03-5273-8160)までお問い合わせください。皆様からの応募をお待ちしております！

From Negros, Philippines [ネグロスより]

カネシゲファーム・ルーラルキャンパス(KF-RC) 2011年の抱負を語る

カネシゲファーム・ルーラルキャンパス(KF-RC)は、草だらけの農場を開墾してから2010年12月でちょうど1年半を迎えた。「開拓者」の一期研修生6人は2010年9月に卒業し、うち3人はさらに技術を磨きたいと農場に残り、3人は地元に戻った。

イでは、料理用の油や醤油・塩とジュース・酒以外はすべて農場の生産物で「自給」できたことは、みんなにとって本当にうれしいことだった。在来種で作った米・野菜・鶏とアヒル料理・養殖魚のから揚げ、ヤギを一頭絞めて様々な料理を堪能した。地元に戻った一期生たちは「やっぱりKF-RCのみんなと一緒に一番楽しい」と前日から泊り込んで料理の腕を振るってくれた。お腹を満腹にした後、全員で2011年の抱負を語った。

第一期卒業生たちの抱負

エスペランサに戻ったマック・マックは「農場から購入した豚は2頭とも順調に育っている。配合飼料は毎週農場に取りに来るので、週1回はみんなに会えるし相談もできるので孤立感はない。両親が僕のためにカラバオを買ってくれた。次の雨季には水田を始めるので、手伝いに来てほしい」。同じエスペランサのダンダンには、「かなりの野菜

を植えたけれど、親父が頼まれるとタダで近所の人に野菜をあげてしまうのが問題。僕が言っても近所づきあいだから、と聞いてくれない。今度は父親を研修に出したい！」(笑)

KF-RCに住み込み、実質農場長の役割を担っているカルロスの息子レムレムは、サンフリアンサンフランシスコの父親の畑で10種類の野菜・豚・アヒル・鶏・ヤギの複合農業を始めた。従兄弟2人を自分の畑で「研修」させている。

りの自信をつけてきた。「今年子豚を含めて最大70頭まで豚が増えたが、将来100頭体制になっても交配・出産・肥育に関してはやっていける自信ができた。子豚の下痢など多少の手当てはできるが、病気にかかった場合の適切な処置がもつとできるようになりたい。将来は、チョリソチョリソなど簡単な加工所を作る夢をもっている」。

ジョネルの相方、エムエムも農場に残った二期生。「農場が経済的に軌道にのることが、来年の課題だ。僕は野菜作りが下手なので、得意な計算を生かして、農場全体の管理をやっていききたい。会計から作付けや収穫、販売の記録、BMWなどの技術の記録も取れるようになりたい」。

受け継がれるKF-RCのモットー

二期生の5人は、3ヶ月間でようやく農場全体の仕事に慣れてきたが、まだ自信なげ。これは一期生も同じだった。しかし1年たった頃から

一期生たちに大きな変化が現れた。「農場がいやなら、いつやめてもいい。マニラに出稼ぎに出ようが、砂糖労働者に戻ろうが君たち次第だ。ただ、農業をやっているなら、という気持ちがあるなら、KF-RCはいつもみんなを待っている」。研修生たちに言い続けてきた農場のモットーは、二期生にも語り続けられている。5人がはにかみながら語った抱負は、野菜だけでなく、養豚技術を身につけたいということ。来月から、二期生5人に2頭ずつ子豚が提供される。自分たちで肥育する体験が始まる。

2011年、KF-RCは養豚を軸にした循環(バイオガス・BMW活性水堆肥)農場を整備し、本来の目的のひとつだった地域農民・そして農村女性が集い学びあう、ルーラルキャンパス(農民学校)を本格的に開始することをめざしている。

(APLAファイリビデスク・大橋成子)

〔注〕BMW・バクテリア(糞生菌)・ミネラル菌(岩菌)・ウォーター(水の略)バクテリア・アトミネラルの働きをうまく利用し、土と水が生成される生態系のシステムを人工的に再現する技術のこと。

【事務局だより】

事務局の動き(2010年11月～2011年1月)	
10月 26日～ 11月 30日	グリーンコープ共同体“from ネグロスセミナー”が行われ、大橋と吉澤が各地を訪問しました。 <small>グリーンコープ生協(長崎)、グリーンコープ生協ひょうご、グリーンコープかごしま生協、グリーンコープ生協さが、グリーンコープ生協おいた、グリーンコープ生協くまもと、グリーンコープ生協ひろしま、グリーンコープ生協おさか、グリーンコープ生協やまぐち、グリーンコープ生協おかやま、グリーンコープ生協(島根)、グリーンコープ生協とっとり(田村剛)</small>
11月 2日	カカオ・パームオイル研究会・第4回が開かれました。
11月 10日～ 12月 10日	東ティモール、フィリピン・ネグロス島、北部ルソンへ野川が出張に行きました(フィリピンは東ティモールの農民と一緒に訪問)。
11月 13日	パルシステム東京40周年記念『食のチカラ』に出展しました。
11月 13日～ 21日	カネシゲファーム・ルーラルキャンパス(KF-RC)のコーディネーターであるアルフレッドさんが来日。BMW技術協会全国交流会に参加しました。(そのほか山梨県白州郷牧場、埼玉県小川町霜里農場と風の丘ファームを訪問)
11月 18日～ 22日	「互恵のためのアジア民衆基金」の第2回総会及び交流ツアーにに秋山、大橋、野川が参加しました。
11月 18日～ 20日	BMW技術協会全国交流会にアルフレッドさんと吉澤が参加し、KF-RCの報告を行いました。
11月 23日～ 12月 13日	東ティモールよりオルター・トレード・ティモール(ATT)社のダニエルさんとルシオさん、農民のアフォンソさんがフィリピン(ネグロス・北部ルソン)を訪問し、交流しました。
11月 25日	『APLA/あぶら公開講座・農と食を考える』第8回を開催しました。
11月 27日	第6回アソシエーション文化祭に出展しました。
11月 27日	国際有機農業映画祭に出展しました。
11月 29日	ドゥコープ平和団体交流会に松田が参加しました。
12月 2日～ 6日	BMW協会主催カネシゲファーム・ルーラルキャンパス視察ツアーが開催され、大橋と吉澤が同行しました。
12月 10日	(株)大地を守る会とATJが行ったバナナ学習会(カフェ・ツチオーネ)に吉澤も参加しました。
12月 15日	国際連帯税シンポジウムに参加(APLAとして賛同もしました)。
12月 15日～ 16日	農民寄り合い(“TPPに反対する人々の運動”に発展)に吉澤が参加しました。
12月 16日	『APLA/あぶら公開講座・農と食を考える』第9回を開催しました。
12月 17日	(株)富士通のCSRイベントに出展しました。
1月 7日	カカオ・パームオイル研究会・第5回が開かれました。
1月 13日～ 2月 11日	東ティモールへ野川が出張しています。
1月 16日	パルシステム・セカンドリーグ支援室と築地本願寺で開催された安穏朝市に参加しました。
1月 20日	『APLA/あぶら公開講座・農と食を考える』第10回を開催しました。
1月 22日	APLA理事会・評議員会開催。
1月 22日～ 29日	フィリピン・ネグロスよりアルフレッドさんと大橋、フィリピン・北部ルソンよりグレッグさんが東ティモールを訪問しました(野川同行)。
1月 30日～ 2月 5日	北部ルソンのグレッグさんが、東ティモールのコーヒー産地を訪問し交流しました(野川同行)。

事務局からお知らせ

アユス仏教国際協力ネットワークより助成内定をいただきました。

アユス仏教国際協力ネットワークが募集する“NGO人材支援”に応募し、2011年4月から3年にわたり助成を受けられることになりました。初年度180万円、次年度150万円、最終年度120万円です。事務局の件費にあてていきます。

パキスタン洪水被害緊急支援のご協力をありがとうございました。

2010年に呼びかけていましたパキスタン洪水被害支援ですが、皆様からいただいた支援金をNPO法人日本ファイバーリサイクル連帯協議会(JFSA)へ2010年12月20日に振り込みました。

金額は下記のとおりです。皆さまのご協力の心より感謝申し上げます。

募金総額	153,310円
事務局経費	15,041円
JFSA振込額	138,269円

編集後記

中国と国境を接するラオスやカンボジアの村を歩く、隣の他国、中国からやってくる資本に土地が買い占められ、そこで耕していた小さな農民が土地から引きはがされていく事態に至るところで出くわす。

その資本のものをたどっていくと、アメリカの超金融緩和と政策によるドルたれ流しに行き着く。そのドルが新興国に流れ込み、新興国の農村の壊し、隣国へ押し出される。そして、その農業と農村、農民の暮らしを壊す。そのアメリカにびったり寄り添い、日米同盟の名のもとに国内の経済を壊そうとしているのが、菅民主党政権だ。今号では、そのことを村を舞台に考えた。(大野)

2010年秋に企画した“弥栄を訪ねる旅”を通じて見てきたことを、Topic9で相川さんが語ってくれている。海外の農村現場をみているNGOと日本の農山村の地域づくりの現場では、実は共通の課題があるのでは。そして、その現場をつなげていくのはとてもおもしろいことなのではないかと思っている。世界の状況が苦しくなっていくか、目に見える確実な人と人の関係づくりがますます重要になってくる。(吉澤)

今月エビ加工労働者を招いてシンポジウムを開きます(裏表紙に詳細あり)。それに合わせて発行するブックレットは、報告に加えて来日する労働者のエッセイやエビのレシピも掲載と読み応え充分。さらに今号と同時発行のAPLAレポートno.4は、農業・原子力・ODAという3つの観点から民主党の成長戦略を考察しています。昨年から水面下で動いていたあれやこれやを大放し！ひとつでも目に留まるものがあれば幸いです。(松田)

ハリナ HALINA

2011年冬号 vol.02-no.11
2011年2月1日発行

[編集長]

大野和興

[編集者]

吉澤真満子、松田麻衣子

[表紙写真]

長倉徳生

[デザイン・制作]

十年舎

[編集・発行]

特定非営利活動法人APLA
(APLA/あぶら: Alternative Peoples Linkage in Asia)

〒169-0072

東京都新宿区大久保2-4-15

サンライズ新宿3F

tel. 03-5273-8160

fax. 03-5273-8667

e-mail info@apla.jp

URL http://www.apla.jp

[印刷]

株式会社セイズ

APLA web siteでは、本誌に掲載されている写真の一部をカラーでご覧いただけます。
http://www.apla.jp/05/05_halina.html